わかやまスポーツ お宝を巡る

故尾藤監督の特大パネル

春夏連覇 県民至福の時

甲子園春夏連覇を果たし、選手たちに胴上げされる尾藤さんを写したパネル＝マツゲン有田球場で

第41回社会人野球日本選手権大会に4回目の出場を果たし、31日に初戦を迎える和歌山箕島球友会は、マツゲン有田球場（有田市）の指定管理者となっている。その「本拠地」の正面玄関を入ると、先月の全日本クラブ野球選手権大会で3回目の優勝を果たして獲得した優勝旗をはじめ、これまで栄光を物語る数々の品が展示されている。なんといっても一番目を引くのはチームの生みの親の一人、県立箕島高校野球部元監督の故尾藤公さんが満面の笑みをたたえながら選手に胴上げされる姿が映った特大の写真パネルだ。傍らには同校のユニホームなども展示されている。

写真が切り取った一瞬は、県民のみならず、和歌山にゆかりのあるすべての人々にとって至福の時間だった。1979年8月21日。箕島は13年ぶり3校目（当時）となる甲子園春夏連覇を達成。尾藤さんは選手たちの手で宙に舞った。

地元の選手たちを尾藤さんが手塩にかけて、鍛え、作り上げたチームだった。この3年後に和歌山市・住友金属（当時）の都市対抗初優勝の立役者にもなり、そろってプロ入りする石井毅―嶋田宗彦のバッテリーを軸とする堅い守りと意表を突くプッシュバントなどバラエティーに富んだ攻めで、粘り強く一戦一戦選手が成長しながら勝ち進んでいった。

尾藤公さんの葬儀で祭壇に手を合わせる星稜の山下智茂総監督（左）と横浜の渡辺元智監督（肩書はいずれも当時）＝有田市箕島で

センバツは準決勝で強打の小早川毅彦（元ヤクルト）がいたPL学園、決勝で牛島和彦（元ロッテ）―香川伸行（元ダイエー）がバッテリーを組んだ浪商（現大体大浪商）の大阪勢をともに1点差で際どく降して70年、77年に続く3回目の制覇。夏の甲子園は3回戦で球史に語り継がれる星稜（石川）との大激闘で延長十二、十六回にともに2死から同点本塁打が飛び出して十八回サヨナラ勝ち。この夜、尾藤監督は消灯時間を撤廃し、夜を徹して熱戦を振り返り、熱く語り合った選手たちは「ここまで来たらまた優勝しようや」と改めて結束。決勝で「山びこ打線前夜」だった池田（徳島）にまたしても1点差で競り勝って、上野山善久主将は紫紺に続いて、深紅の大優勝旗も手にした。

センバツ3回優勝、甲子園春夏連覇はともに過去7校が達成しているが、公立校で達成したのはいずれも箕島のみ。だからこそ郷土チームの快挙に人々は熱狂した。

その後、箕島は甲子園から遠ざかることも多くなり、尾藤さんは95年夏の和歌山大会を最後に監督を退任。2009年のセンバツで箕島が18年ぶりの復活出場を果たし、2勝したのを見届けた後、がんのため11年に68歳で亡くなった。

球場から有田川をはさんだ対岸にあるグラウンドでは現在、尾藤さんの長男、尾藤強監督が率いる同校が、黄金期を取り戻そうと練習にはげむ。パネルの中の尾藤さんはその様子をずっと見守り続けることだろう。

【矢倉健次】